

書學捷徑

書

乾

C728

1

京都大学
附属図書館

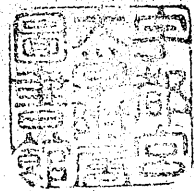
大川

184

大川家

184

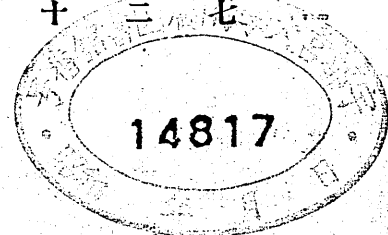
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6



書學捷徑目次



| | |
|-------------|-----|
| 點畫 | 七 |
| 結體 | 十二 |
| 字體 | 六十 |
| 執筆 | 六十三 |
| 用筆 | 六十八 |
| 正書の體を論ず | 八十 |
| 古碑帖を臨するの法 | 八十三 |
| 臨本 | 八十五 |
| 能書は筆を擇ばざるの辨 | 八十七 |



書學捷徑



書學捷徑目次

| | |
|-------------|-----|
| 點畫 | 七 |
| 結體 | 十二 |
| 字體 | 六十 |
| 執筆 | 六十三 |
| 用筆 | 六十八 |
| 正書の體を論ず | 八十 |
| 古碑帖を臨するの法 | 八十三 |
| 臨本 | 八十五 |
| 能書は筆を擇ばざるの辨 | 八十七 |

紙 墨

八十九

文字の變遷

九十

目

次終

書 學 捷 徑

正書

默 鳳 田 圓 述

書は日常必需の要具にて。其官吏たるも民人たるを問はず。凡百の事務に鞅掌する者は。日として筆を執らぬことは有りますまひ。書簡に記録に議案に簿記に。其種目を擧ぐる時は屈指す可からずで有ります。然るに今の學校卒業生にして始めて實務に従事するもの。十の八九は皆作字に困しむ。即ち自己の思ふ如く筆が遣^{つか}へぬと云ふとは。畢竟學校に於て習字教授法の不完全なるを習字に重きを措かざるに原因するので有りませう。作字

二
の自在ならざる爲めに親子の消息を怠り。知友相互の用務を缺く等の事往々ありて。遂には漢字を廢する云ふ出來ない相談會の起ることもある。其漢字なるものは諸君も詳知せらるゝ如く。千數百年以來我國字となりて。我朝の典籍は皆漢字で満たされ。又恐れ多くも御歴代の尊名より官名人地名物名等も皆漢字で作られて居る。又平假名片假名も漢字を省略せしものゆゑ。我國字と稱して毫も差支へは有るまひ。即ち昔時より我朝では我國字となり朝鮮も亦た朝鮮の國字と爲て居るので有りませう。言を換て申さば東亞の文字で有る之を廢する云ふとは到底言ふ可くして行ふ可からざる空論である。其れよりは此東亞

文字の作法を簡易にして文字を書くに便ならしむる方が利益である。亦世に行ひ易ひと思ひます。故に余は東亞新字稿なるものを著して世に問ふことにしました。併し此は別問題で有りますから。先づ今の習字法に就て曾て經驗せし方法と支那古今の教授法とを參酌し。聊か其考案を述べます。

我國從來の習字法は。作字と字義を覺へる二つの目的を持って居る。尋常小學校は右にて宜しいが。高等小學及中學校等苟も中等以上の教育を受んとするものには。習字科を獨立せしめ。習字課に於ては作字と字體とを授けねば。眞の習字の功を奏するところには出來ませぬ。習字が出來ても字體を辨ぜざれば其用を全ふ

しない。誤字を作りては他人に通じない。今の學校の如き習字に冷淡なる教授方では何の用をも爲さない。前に陳る如く。社會の實務上に最も用の多き書に於て。如斯冷淡極る教授を爲す云ふは。殆んど其理を解するここが出来ませぬ。余が昨年五六の縣を漫遊しました。其漫遊先きて書記官とか參事官とか云ふ人に出逢ひ。其人々の言に學校で書を能く學ばない爲めに今日事務を執るに甚だ困ると云ふことであるから君は何學校を卒業されたと問ひしに。大學さこの答へゆる。然すれば府縣などの官吏に爲らずに。生涯字を書かぬ學者で遊んだら宜しからふと云ふたら。ひやかしては困る實際さうて有るからと言はれしが。いか

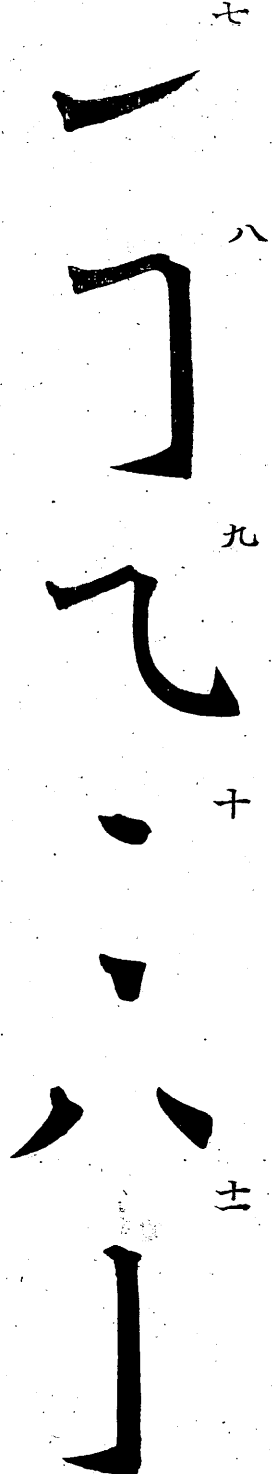
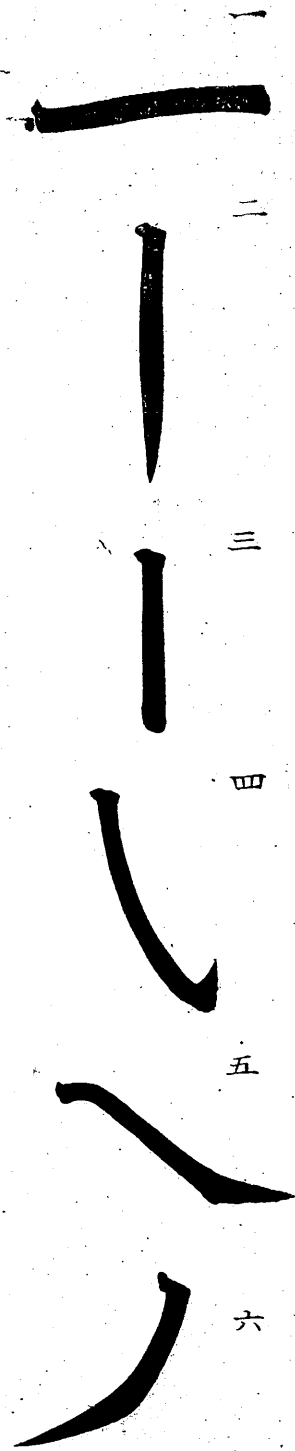
にも學士にして書が出来ぬと云ふことは餘り立派な話でも有りますまい。右は學校に於て書に重きを措かず且つ習字教授法の不完全なる結果で有りませう。

書學を修めぬ人は書はむつかしいものゝ様に思ふて居る様だが。決してむつかしいものでは無い。我國從來の教授法では作字の順序が立っていない。本を捨て末を學ぶと云ふ遣方^{かた}で有る。最初から千字文とか正氣歌とか云ふ様なむつかしきものを授ける。而して其手本を臨する計^{はかり}である。故に作字に困むのです。順序を設けて學べば。學び易きものである。但人に據て遲速は有るが。滿十二年以上なれば。大概誰れにも運筆其他のことが解し得らるゝ。

故に書を學ぶには十二年より十六年までが最も大切な時期である。他の學事も多くは其時期に發達するので有るが、書は殊に此の時期が大切である。此時期に於て作字を怠るときは、其生徒は生涯の不幸を見るのである。

然らば如何なる順序を以て作字を授くるか。又如何なる方法を以て字體を教ゆるか。云ふに、其は作字は楷行各三百七十八。草書大約四百七十八。又字體は偏旁四百計りを授くれば、十分の働きを爲すものである。尤も此は十二年以上の者に授ける法則である。先づ楷書の作字法を左に

第一課 點畫



楷書は右の點書を以て組織されて居る。故に此運筆を能く習熟すれば、如何なる文字も立派に出来るのである。此點畫の運筆を研精するは、恰も匠が木造家屋を建築するに先づ棟柱梁椽等を造るに同じ。ここで其棟柱梁椽等が善く出来て居れば、家屋を組建るに悉く其位置を得て且つ堅固であつて、風雨に逢ふも傾倒しない。若し棟柱梁椽等が粗造であるときは、建築するに骨が折れて而して風雨に逢ふと傾倒するところがある。作字も亦然りて右の點畫を能く腹に入るまで習熟しなければ成りませぬ。若し如斯なものは何うてもよいと云ふて習熟しない時は、其作りし文字の結體も整はず。且つ軟弱にして少しの風波に逢ふと直ぐ

傾倒する様な文字になるのです。逆も其勢如、舞鳳翔鸞、とか如龍跳、天門虎臥、鳳閣、とか云ふ様な立派な書は出来ませぬ。故に古人も此事を八釜しく説て居ます。今一二のものを舉ぐれば、

(一) 横畫又は勒法と云ふ 衛夫人曰。如千里陳雲、隱々然其有形。王右軍曰。如長

舟之截小渚。翰林蜜論云。如長錐界石。

(二) 縦畫又努と云ふ。懸針 衛曰。如萬歲之枯藤。翰云。如長錐綴地。

(三) 縦畫垂露 王曰。如春筍之抽寒谷。董內直曰。如露水之垂。

(四) 背躍と云ふ 歐陽詢曰。如長空之新月。王曰。如長松之倚谿。

(五) 磔 衛曰。崩浪雲奔。歐曰。如一波常三過筆。

(六) 掠 衛曰。陸斷犀象。歐曰。如利劍截斷之角。

(七) 策

(八) 勞句 歐曰如萬鈞之弩發王曰如雲中之掣電

(九) 拋背 衛曰百鈞弩發王曰如壯士之屈臂

(十) 點又は側云ふ 衛曰如高峰墜石。磕々然實如崩也。永曰蹲鴟而墜石以下

見第
四詩

こ以上皆譬を引て其形情を説き。一筆も忽せにせざる事を示したので有る。(用筆部と参照すべし)即ち此點畫を十分に習熟するときは、文字の結體も容易く、而して其作る所の文字に筋骨が備りて、立派な書になる。是れが作字の捷徑である。然るに従來の如く最初より一字の形態を爲せし文字を習ふが故に、文字の形態

を作るに窘められ、遂に立派な文字が作れないのである。匠が棟柱梁椽等の作方を十分にせずして家屋を建築すると同して、堅固な家屋が出来ざるのみならず、其粗造なるが爲め却て餘計の時日を費す。即ち拙匠は棟柱梁椽等の作方を十分にせずして家屋を建築するを速き。拙書は點畫を習熟せずして文字を作るとを速く。爲めに堅牢なる家屋も出来ず、亦た立派な文字も出来ないのである。兩者共に其本を務めずして其末に趨るべからである。横文を作るも亦た其ふで有りませふ。最初ABCを一字づゝ習ひ。此を習熟せし後ちでない。文字を綴るときに困難を感じ而して其綴方が善く出来ませぬ。即ち漢字の一點畫は横文

の一字で有る。漢字は點畫を合せて一字となり。横文は數字を合せて一語となる。其理は一です。

右點畫を習熟せし後は左の數課を授くるのです。是亦十分腹に入るまで習熟せねばなりません。

第一課 以下結體

十 上 下 二 五 土

士 五 並 三 王 主

右二三字共に上の一は微し仰き。下の一は微し覆す。工于示五王主の横畫も亦た然うです。王曰。偃仰平直振動令筋骨相連。意在筆前。然後作字。若平直相似狀如算子。上下方整。前後齊平。便不是書。こある。右等のとに注意せねばなりません。

第三課

十四

口 曰 巾 中 甲 乍
井 丁 了 子 且 皿

右巾中の縦畫は懸計にて甲井乍等は垂露である。又口の左右の筆は微し内に張り。曰は左右より微し圍みて居る。即ち一字の照應とも謂ふべきもので有つて。第二課の二三と同一理である。注意して作らぬば成りませぬ。

第四課

十五

八 小 六 只 余 京

六平共烈心必

十六

此課に於て最も點に注意を要するので有る。點には種々の變化がある。王曰。作點必須磊磊如大石之當衢。或如蹲鴟。如蠲斗。如瓜瓣。如栗子。如鶴口。如鼠尿。如此之類各稟其宜。こは皆點の形狀を評ぜしものなるが。其瓜瓣。栗子。鼠尿は之を楷に用ふるは如何だと思ふ。行草の點を見て宜しからう。兎に角點は文字の眉目であつて其形情變化の多きものである。又歐曰。應接字之點畫欲其互相應

接。兩點者如小八自相應接。こありて左右共に相隔てゐるなれども相互に應しておる様に注意して作るのです。

第五課

七此世乙九凡
也巳孔北元兄

十七

第六課

月用乃勿幻以

十八

戶尹少多步朋

第七課

戈曳代式武或

戊成氏民牙弟

十九

第八課

人入又尺大夫
丈史及文父交

第九課

木米来爪瓜衣
不之乏足走是

第十課

二十一

水永豕災巢玄
系春卷氣風飛

右第七課の戈は王曰。落筆峨峨如長松倚谿谷。若欲倒也。復似百鈞之弩。初張。其戈意妙。理難窮。放似弓張。箭發。收如虎鬪龍驤。こありて長き松が谷間より生ひ樹て居る様で倒れ様とする形がある中に百鈞もある強き大弓を引く如き有様が有つて。其妙理を云ふものは窮めるとの出来ない位のもので有る。又放つと云ふ様は弓を引張て箭を發するに似て。收りて居る様子は虎が鬪ひ龍が飛揚りて居る如き様で。動かぬ様であつて。其實は飛動して居る様だと云ふ意味である。又第八課のノへは。王曰。ノ不宜遅へ不宜緩。こありて二つ共に餘り筆を遅く運ぶと力を生じない。と云ふて餘り速と形態を爲さない。と云ふ意である。此は用筆の部に詳

二十三

かにある。

姜堯章續書譜云。點者字之眉目也。全藉顧盼精神。有向有背。隨字異形。橫直畫者。字之體骨。欲其堅正勻淨。有起有止。所貴長短合宜。結束堅實。ノヘ者。字之手足。伸縮異度。變化多端。要魚翼鳥翅。有翩々自得之狀。いし者。字之步履。欲其沈實。こありて。文字の形情は粗ぼ説き盡してある。即ち此用筆は前十課に於て其大略を示し。後の課に於て之を詳悉するのである。

右十課の中第六課より第十課までは。文字中最も作り難きものである。此を習熟せば。半ばは卒業するので。亦之を習熟して。後の課に入るに實に作字が容易になる。故に以上の課に於ては。

分に勉強しなければ成りませぬ。恰も木匠が屈曲せる材を以て梁を造り。硬木を截斷磨琢して柱を作ると同じで。次の課に入るに木匠が如此く刻苦して作りし棟柱梁椽等を以て家屋を組建る如きものである。又之を山路に譬ふれば。前の十課は登り路にて。或は嶄巖絶壁を攀ぢ。或は馬脊の如き峻嶮なる所を匍匐し。或は谿谷を跋涉するに云ふ様な困難を感じる處もあるが。次の課の初めは。山の頂上に於て四方を眺望する如く。作字が容易なりて愉快を感じるのです。併し前の十課を十分に習熟しなければ。此愉快は感じない。又其れより漸々山路を降るのです。此降路も愉快です。然れども足に任せて降ると進み過ぎて足が疲勞しま

す。文字に力が入らなくなる。故に徐々に降りて行くのです。能く一字ごとに注意を怠らず學んで行くのです。唯末になるに畫が多き故に少しく面倒です。併し前十課の如き感じはありませぬ。右に陳るが如きものゆゑ。此前後の文字を假りに一ケ年の課とするときは、前十課を半ケ年とし、後の課を亦た半ケ年とする割合ひである。楷行艸三體の中では、楷が最もむつかしきものである。姜堯章續書譜に艸書千字、不抵行書十字、行書十字、不抵眞書一字、と云ふてある。楷を學ぶに假りに二ケ年を費すことすれば、行草は各一ケ年を費せば卒業する位のものである。次の文字は單獨の字より漸次進んで偏旁を合せる文字で有る。即ち粗より密に入るのです。又二字乃至四字つゝ、類を集めて編してあるのです。故に熟字とか讀方とか云ふには少しも關係しない。作字と云ふ事が目的であります。

日 目 寸 才 片 斤

手 乎 可 止 山 正

女安母田田白
向而雨南公去

左右友有耳身
羊年川州先光

吕昌豆至皇老
者居君房罔周

行好妙昨蛛勒
助仁仕性采受

社祖袒知字宮
官味明校秩欲

路政版抱施本
各谷卯艸拜印

即部郡東泉事

命金會琴良長

其典省著高萬
後農帝常野靜

眼報陸特勇勢
海淡滔諂普書

朝拂匝區林絲
琢城賦歲盛象

豪冠旭魁孰凱
吾善美義妻婁

則對贊賞禁祭
登食倉匍菊業

素意單軍肅為
鳥魚無需留精

博傳建道趣題
撓張龍亂疏既

說畫畫賜陽聰
操館構輔輪齊

齋顧體難雖國
園開鬪療慮慶

歸滯攝獲優繁

纂蔓濯懼譽學

鶯敬覽森車轉縣

緯績讀諛壽尊

御樹謝衛縱擬
儲辯龜竈藥懲

聲磬變響饗選
還颶戮織鐵巖

靈 螫 騰 鹿 犇 驗 鱸
醲 齡 觀 瀛 灣 嬰 鸚 鳥

以上點畫と結體とを通じて三百八十餘字である。此を習熟せば何かなる文字も自在に作り得らるゝ。千字文を習ふよりは遑かに此方が速く作字を解得する。且つ必用の文字ばかりで有るから。働きを爲すとも亦割合に多い。然して此文字を習熟せし後は。此他の文字を生徒に自ら作らしめ。而して其文字の惡しき處を直して遣るのです。右様するときは生徒は自ら工風して文字を作ら。故に作字上に大なる働きが生じてくる。即ち活用せしむる方法である。從來の如く手本の文字を習はせ其れを直して遣る計りでは。手本にある文字は作り得らるゝも。其他の文字に至りては更に形態を爲さない。是則ち習字法の缺點である。其結體

のゝに就て古人の書訣中必要と思ふを左に

部勅即幼 左昂右低謙退以承

讀績時 右聳左平以小事大

至豆豈且 上輕下重承載于上

體顧願難 左右均平如兩人相對並

謝樹御術 中間周正左右若拱揖

七屯也宅 平則無勢

文尺史吏 攢頭收尾

與典其異 上合下開

文天交父 又對正中

岡岡同周 四直寬大

菊蜀匍匐 不宜屈裡

永水東泉 貴于中正

乎于手予 勿令太偏

印艸弗拜 左不欲長

仁性往恤 左不宜短

中市申巾 鋒欲其正

繡經 忌寬疎開散

野陌盱明味 首欲平

細知和辰後 足欲齊

黍食炎焚 上住下放。上放下住。
冠冠寬冤 上蓋窄。句小。下腕寬。句長。
禹萬衆 上窄。下寬。
普替齊雲 上濶。下窄。
斂敬歐剛 左大。右小。
蕃衝擲 中間寬大。
鶯鸞驚 上下微偏。中窄。勿長。
龜曩竈 宜于緊布。
晶磊森轟 重疊。處取至均。
靈鬱 繁紊中求。端整。

藥轡轡懲 欲圍圓。

宇宙宮官 上下宜。清覆盡乎下。

呂昌哥棗 上小。下大。

林竹棘 左宜微窄。

好妙飭舒 妙於廻避。

素章累意 量其疎密布置均停。

右は結體に關するものにて。一樣には論じられぬが。併し結體上の參考として益の有る事です。更に歐陽詢書訣中にて必要と思ふものを左に載せます。

避就 避密就疎。避險就易。避遠就近。欲其彼此映帶得宜。又如廬字。

上一撃既尖下一撃不相同。府字一筆向下一筆向左云々。こある右に據て二三の字を示して参考に供す。

廬 廬 府 府 庭 庭

頂戴。字之承上者多。唯上重下輕者。項戴欲其得勢。如疊壘。鸞聲。鷺鷥之類。八訣所謂正如人上稱下載。又不可頭輕尾重是也。こある。併し頭に力を入れ尾に筆力を用ひない云ふではなく。唯だ上を大に作り下を微し小に作る云ふのである。下よりも上が大になるこ宜しく無いと解すればよい。

偏側。字之正者固多。若有偏側欹斜。亦當隨其字勢結體。偏向右者。如心戈衣幾之類。向左者。如夕明乃勿少朋之類。正而偏者。如女丈又互不之類。字法所謂偏者正之。正者偏之。こある。文字なるものは本こ正云ふものを基礎にせねばならぬ。恰も人の直立して居る様なものである。此が字の態であつて。其れから其人が歩みだす。ずるこ足は勿論體も手も動く。之を字で謂へば生動するのです。直立は即ち字の態にて歩行くは字の生動である。偏者正之。正者偏之。こは面白き意味のある語にて。文字の生動を意味して居るのです。此を平易に解けば字は正が態である。故に少夕乃または戈心幾の如き偏するものも。其中心に正云ふものを存して

居るから其中心と云ふとを心に持て居て字を作らねばならぬ。偏しながらも其字は倒れてゐない。立ておる様に作るに解得すれば宜い。正者偏之。と云ふは畢章禮正等の如き正しくして左右に少しも偏しなひ文字でも方形なる箱を作る如く正しく書しては文字に生動が無ひ。故に微し偏するも文字が生動しておる様に書かなければならぬと解得すれば宜しい。

相讓 字之左右或多或少。須彼此相讓。方爲盡善。如馬旁糸旁鳥旁諸字。須左旁平直。然後右邊可作字。否則妨礙不便。云々とあるが。讓る計りで無く省く例も夥多ある。歐又た曰く。字難結體者。或因筆畫少。而增添。或因筆畫多。而減省。此の相讓と増減に就て二三の

體を左に。

馳鷗鶴鴻織

右の鷗織の二字は相讓にて馳鶴鴻の三字は相讓と省畫とを兼ねておる文字である。又増畫は

辯親壁

の類にて親の亲。辯壁の辛は一畫多し。此等が増畫です。其れから補空と云ふとがある

神建

右建神共に點のなき字であるが。結體して後ち。字に空處があつて佳ならざるごきに。點を附して其空處を補ふのである。併し此は楷書には猥りに用ひないが宜しい。

借換。如醴泉銘祕字(中略)秋之爲𤇑。鵠之爲鶯之類。爲其字難結體。故互換。こあるが秋を𤇑に作るは借換に非ずして𤇑は篆文の體である。

秋 祕 榮

秋は右に載する字の誤寫なるべし。祕は即ち醴泉銘の祕字なり。榮も亦借換にて此は結體に便なるものにて此他に夥多ある。

撐柱。字之獨立者。必得撐柱。然後勁健可觀。如可下永亨丁午司卉草矛巾千予之類是也。

朝揖。字之凡有偏傍者。皆欲相顧。兩文成字爲多。如鄒謝鋤儲與三體成字者。尤欲相朝揖。八訣所謂遞相顧揖是也。

却說前に載する文字を習ふには。最初は半紙に六字若くは八字位を書し。次に十八字豎三行 横六字。又其次に三十二字豎四行 横八字。終りに小

楷に作るのです。張芝曰。學者宜先大書。不得從小。恐後展舒不開。こありて大字より學ぶ。こ云ふは古今の定論である。又索靖曰。大字

宜^シ結密^シ而無^シ間。小字宜^シ寬綽^シ而有餘。とあるが。大字は閒^マの有^リ易^シきもの。又小字は結密になり易きものです。故に大字を作るには小字を作る意を以て體を結び。小字は大字を作る意を以て體を結ぶと云とが肝要である。故に此の一の手本を以て之れを大に作り。又之に小に作るのです。

字體

字體を授けるとふとは。從來何れの學校でも爲^シなひ事であるが。前にも陳る如く此は實に必要缺く可らざる事にて。其之を授くるにもまた之を學ぶにも。決して至難の業で無い。實に授け易く亦た學び易き事で有る。其法方は文字の偏旁を類別して授ける

ので有る。即ち左に其一例を擧ぐれば。

禺禺 禺禺 ああ

を首に大書し次に。遇隅偶寓愚等の禺に従ふ文字を列記し

各一
體乃

至二體にて
可なるべし之を教場に展し生徒をして書取らせるのです。生徒は

此書取し文字を保存して復習するのです。然る後ち教師は時々曾て授けし字體に就て記憶して居るか否やを試験するのである。此は偏旁合して四百種位なものです。假りに之を三ヶ年に課すれば。一ヶ年百三四十種にして一ヶ月僅かに十種餘である。極めて容易なるとで有りませう。然して生徒が益を得るとは實に

至大なるものと思ひます。此を學ぶが爲めに手本以外の字體を詳悉し誤字を作らぬ様になります。如斯有益なる法方を講究せずして高等小學では何字を授けるとか中學では何某の千字文を教へるとか云ふ有様にて生徒は僅かの時間に作字の何たるを便ぜず卒業して後各社會の實務に従事するや始めて文字の必要を感じ大に苦慮するのである。之を兵事に譬れば學校なるものは練兵場である。又演習場である。射的場である。兵士が此等の事を習熟して後實戦場に向ふは生徒が學校を卒業して後社會の實務に従事すると同じとにて。若し練兵の時に於て儀式上空彈を發す位のとのみにては實戦場に至りて能く敵と對戦す

とは出来まい。今の習字教授法は恰も儀式上空彈を發つ位のものである。

執筆

古來執筆の事は種々論じてあるが結局總身の力を指頭に集めて筆を執ると云ふことが眼目です。彼れ此れむつかしく論ずる程の事で無い。各々執り易き様に執るのが宜しいのです。蘇東坡曰。把筆無定法。要使虛而寬。歐陽文忠公謂余當使運而腕不知。此語最妙。方其運也。左右前後却不免欹側。及其定也。上下如引繩。此之謂筆正。とありて總身の力を指頭に集め。確りと筆を把るときは。指實して掌空しくなるは自然の理です。要虛而寬とは此を謂ふので

ある方其運也。却左右前後不免欹側。とは横畫を作るときは筆鋒は自然微し右に側き豎畫即ち懸針の如き者を作るには筆鋒は微し下に向ふ。筆を眞直に豎てたまゝ文字を作ると云ふとは出來なひ理である。不免欹側とは此事を云ふのである。及其定也。上下如引繩。とは筆は左右前後に欹側するとは免れぬもので有るが精熟した後は頓と上下繩を引くが如く知らず筆が運べて行く様になる。故に當使運而腕不知。と云ふのです。黃山谷曰。心能轉腕。手能轉筆。書字便如意。古人工書無他異。但能用筆耳。とあるも亦た右に陳べし理であります。又盧雋臨池訣云。用筆之法。拓大指撮中指。斂第二指。拒名指。令掌心虛如握卵。此大要也。とありて。二指に

て執るときは筆に力が入らぬ。三指にて執るが通例であります。我國の人は古來懸腕直筆と計り云ふて。何なる文字を作るも直筆で無ければ成らぬ様に思ふて居る人が多いが。此も間違ふたとです。劉有定曰。篆直分側。直筆圓。側筆方。用法有異。而執筆初無異也。其所以異者。不過遣筆用鋒之差變耳。盖用筆直下則鋒常在中。欲側筆則微倒其鋒。而書體自然方矣。若夫執筆則不可不直。古人皆用直筆。王次仲等造八分。始有側法。とありて篆書を作るには直筆でなければ善く作れないが。八分即ち漢隸を作るには側筆でなくては善く作れぬと云ふとです。楷行草共に側筆でなくては力が入らぬ處も有る。例へば楷の磔掠の如きもの。及び行の立刀。草の

豎畫なほども。側筆でなければ十分力が入らぬ。併し側筆と云ふも筆を横に倒して執るのでは無い。筆は直に執てへノや行の立刀草のゝ等を作るときは微し側けるのである。元來何書を問はず。文字に十分の力を入れなければ書こは云へないので有るから。直筆であれ側筆であれ。其作る所の文字に力を入れる爲めにするのです。

右は大字を作る執筆にて。小字は亦た小字を作るに便なる様にするが宜しい。其れは如何だ云ふに。左手を右手の下に敷き。左手の背に右手を載せて字を作るが通例であるが。腕枕と稱して。經二寸位の竹を四ツに割りし位の物を右手の下に敷くもある。

細字は懸腕では書くことが出来ぬなれども。腕を机上に附着せしめ。指尖計りて筆を遣ふときは力が入らぬ。故に腕枕を用ふるか又は左手を腕枕の代りにして。其上に右手を載せて。腕を自在に左右前後せしむるのである。

執筆の事は右にて十分と思ひます。別にむつかしき事を云ふに及ばぬ。何ぜならば人各々癖と云ふと有つて一様に論ずるとが出来ない。其癖を枉げては思ふ如く文字が作れ無い。即ち天性に随はれば活動しない。書は活物で有つて人の精神を露すものである。其作る所の文字が紙上に生動する如く書くのが主眼で有る。故に瑣細の事は論じないが宜い。

用筆

六十八

執筆と用筆とは相近きものにて。古人は多く相混して説てあるが。今之を分ち執筆は前に述る如く筆を執るを主とし、また此用筆は筆を遣ふを主として説くのです。即ち筆を如何遣へば文字が活るか死するかと云ふとである。此事も種々説が有ります。如く錐沙畫。如く印々泥。また一點一畫皆有。三折。と云ふとがある。如く錐沙畫。とは沙の上に錐鋒にて縦横の畫を作るときは、錐鋒は其作りし通りに縦横共に確とあるなれども。左右前後の沙が其引きたる筋の中へ墜て錐鋒が藏れる。併し其引きし縦横の畫と云ふものは何と無く確りして居て錐の

如き物で引きし様に思へる。文字を書くも此道理で有つて。其字中に筋骨が無くてはならぬ。其筋骨を肉で裡れて居る様に書くには。恰も沙の上に錐鋒にて文字を書いて其文字を視ると同じ趣がある。其心得て筆を遣ねばならぬと云ふ譬へである。如く印々泥と云ふも右と同一理であつて。泥は軟弱なるもので有つて。其軟弱なる物に堅き物を印すると其堅き物質の稜角は藏れる。併し能く視ると何となく堅牢な物を印した様に視へる。文字も亦た然ふで稜角を外に露さずして字中に筋骨を有して居なければ成らぬと云ふとです。董内直書訣云。綿裡鐵。筆力藏在點畫之內。外不露圭角。蘇東坡所謂字外出力。內藏稜角也。とまた米元章曰。字要

六十九

骨格、肉、須、裡、筋、筋、須、藏、肉とあります。併し正書は起止回折の處に多少の稜角は露はれるもので有る。殊に北魏以上の文字は多く起止回折の處に稜角を露して作りて有る。唐初の文字即ち歐褚の正書も稜角が露れておる。顏柳は多く藏鋒である。稜角を全く露はさぬ様に作るのは篆書と行草とであります。故に正書に於ては筋骨を露はさぬことを主とすれば宜しい。

又鐘繇曰。多骨微肉者筋書。多肉微骨者墨猪。多力豐筋者聖。無力無筋者病。とありて要するに書と云ふものは唯一形態だけ作りては書とは謂へない。又筋骨が無くて成らぬと云ふて細く錐尖の如きもので骨計り書てもならぬ。其骨を肉で程能く裡れて居る

様に書かなければ善き書とは云はれない。右様文字を作るには何う筆を遣へば作れるかと云ふとを研究するのです。併し此用筆とても格別むつかしきものでは無い。我國の人は多く無理な筆遣ひをするから生た字が出来ないのです。無理な筆を遣はなひのは古くは空海近くは徂來。華山。其れから菰翁晩年の書である。故に右等の書は紙上に文字が生動して居る。却説其無理な筆を遣はぬと云ふとは如何で有るか。と云ふに。先づ一筆ごとに筆を改めて行く。即ち横畫の筆と縦畫の筆とは更に筆を變じて書く。と云ふとを解得するのです。

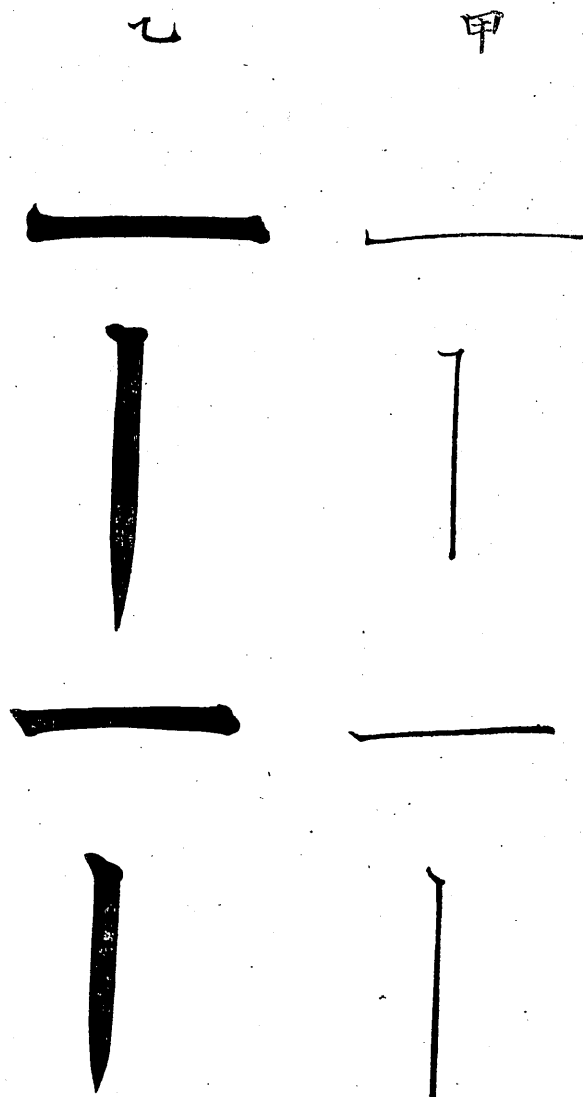
甲 口 口 丁 丁

乙 口 口 丁 一


へると云ふとに心を用ひねばならぬ。形態は少々悪しくとも。一筆ごとに力が備りて居ると立派に見へるもので有る。趙子固曰。態度者書法之餘也。骨格者書法之祖也。また姜堯章曰。與其工也寧拙。與其弱也寧勁。と云ふてある。

其れから力の強い文字を作るも亦た用筆に有るのです如何す
れば遒勁なる文字が出来ると云ふ。起筆と運筆とに在るので
す。左に其一二を示します、

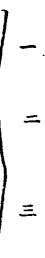
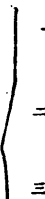
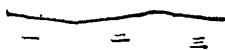
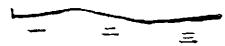
前は骨を示し後は肉を附したものを示したので有る。上二畫の如く縦畫は筆鋒を微し上にその位に筆を起し。横畫は微し左にその氣味に筆を起す。其畫は勁くなる。下二畫の如く稍や斜め



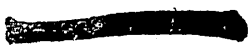
に起すときは弱くなる。又縦横畫共に起筆が善く出来ても。運筆を善くしないと途中で力が抜ける。日本人の書は多く起止に力が有て途中で力が抜けておる字が多い。之に反し支那人の書は起止には左程力が露れずして行筆中に力を存して居る。畫を観るも亦た然である。其れは何故で有るか。云ふに。支那人は用筆と云ふを能く心得て居るからだ。日本人は用筆の事を心得て居ない。畫には少々傳りて居るが。書には傳りて居ない。爲めに行筆中に力を存してゐる文字を書く人が少ないのだ。其行筆即ち運筆は如何だ。云ふ。一點一畫皆有二轉。云ふことを心得て筆を運んで行くのです。縦横共に眞直に速く筆を運ぶと必ず中

途で力が抜ける。故に三たび筆を轉じて行くと云ふことを解得して字を作れば中途で力が抜けると云ふことは無い。其三轉と云ふは畫家が柱や鉤勒の梅を作るときに  の如く筆を細かく折りながら運ばせて行くのと粗ぼ同じ理にて斯く筆を折りながら力の抜けない様に作るときは。近く観るときは見苦しい様だが。少し離れて観ると其柱や梅の枝は凜乎として如何なる風雨に逢ふも柱は倒れず。また梅の幹枝は活て居て拆れ無い様に見へる。字を作るも其心を以て作るのである。一畫三轉と云ふは一畫の中に三たび筆が轉ずると云ふので有る。

甲



乙



如斯く筆を轉するのです。而して其轉したる處を字外に餘り露れぬ様に作るのである。又筆も餘り緩急なき様に運ぶのです。

一點三轉云ふ。點は前にも述べし如く種々の體が有つて一様に解くことは出来ないが左に數例を舉ぐ。

甲

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

乙

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

點を作るも前に有る縦横畫の起筆の如く筆を微し外に仰出る位に入れて引出すのです。又點には種々な説がある顏眞郷の屋漏痕と云ふこともある其れは何だと云ふに空屋の天井より雨

其漏るときは水が天井に玉の如く圓く溜りて後ち下に落る顏眞郷は其れを見て點を作ることとを發明したと申します。又米元章の書論に世人多寫大字時用力捉筆字愈無筋骨神氣作圓筆頭如蒸餅大可鄙笑要須如小字鋒勢備全都無刻意做作乃佳自古及古余不敏實得之。是亦た一考に備ふべき説である一波一拂有三折とは

甲

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

ㄣ

上を磔と云ひ下を掠と云ふ。磔は三折の筆を少し字外に露すも。掠は字外に露れざる様に作るのです。又三轉と云ひ三折と云ふも其筆が字外に露るゝと露れざるとの差のみにて。此理は毛筆の技には總て含有れてゐるのです。行書にも艸書にも。又篆隸にも繪畫にも含んで居る。故に用筆と云ふことは能く心得へて居なければならぬ。

正書の體を論す

今人多は康熙字典其他の字書の主字を以て正當の正書と爲し。其他の文字は俗字と思ふて居る。其れて習字帖なども多くは唐石經文や干錄字書の如き正書にて。最も畫の多き文字で書てあ

る。文化日新の今日に。如斯方針を採るは。愚も亦た甚たしと謂はねばならぬ。正書は本と古隸より變化せしものにて。其古隸は古文籀篆を省略して方形なる文字に爲したもので有る。故に漢より唐の中世までの正書は畫の少い文字で有つた。今の字書の主字は唐の中世に出來た正書で古意に協ふてゐない文字が多くある。此事は東亞新字稿に詳しく解ておきました。新字稿を看ると能く判ります。免に角今日の如きむつかしい文字を兒童に習はせることを止めて漢より唐初に至る正書中にて簡易なる字を選んで習はせるが利益である。即ち義之の樂毅論、大史箴、告誓文、曹娥碑、洛神賦、獻之の十三行、梁の顧野王之玉篇、瘞鶴銘、舊館壇

碑、北魏鄭道昭の諸碑より下て唐の虞世南、歐陽詢、褚遂良等の諸碑に就て選むときは簡易にして作り易き文字が多い。學事多端の爲めに、中學校以下では漢文を廢するとか、漢字の數を制限するとか云いながら、簡易なる文字が有るに強て畫の多き文字を授くると云ふは、其理を解することが出來ぬ。文部の當局者には書學を修めた人が居ないを見る。

以上は學校に對する習字法の企望と獨習諸士の用に供する爲めにて、普通書學の事は右にて盡してあると思ひます。其行草のことは後編に譲り、更に嗜書家の參考となるべきものを左に掲載します。

古碑帖

我國從來の書學は臨するのみで有るが、支那では摸書と鉤勒とが書學の中に在る。摸書とは法帖の文字を薄紙を其上に載せて摸寫するのです。畫家が古畫を摸寫すると同じことである。此摸寫は臨するよりは文字の結體が速く腹に入る。鉤勒は古碑の拓本及墨帖等の文字を同じく其拓本の上に薄き紙を載せて、其文字を雙鉤に寫すのであつて、此はまた一點一畫ごとに其用筆の鹽梅や結體の位置が一層能く腹に入る。故に摸寫するここも亦た必要である。併し摸寫計りでは文字に力が入らぬ。因て更に古碑の拓本を壁上に展して之れを臨するか。又は墨帖を目前に開

展して之を臨するのです。即ち其古碑帖の文字の精神の存する所を能く觀察して筆力を用ひて之を臨するのである。多くの人は墨帖を左に置いて臨するが、左に在るよりは目前に在る方が文字の精神や位置を観るに便である。又我國の人は墨帖を臨するに其墨帖の文字の良否に係らず悉く之を臨するが通例である。支那人は古碑墨帖共に其善き文字のみを選び、其文字に朱點を記し、然る後に之を臨するのである。古人の書に雖も悉く善き文字のみとは謂はれない。多き中には不出來な字もある。又刻者が刀を誤りて掠礫其他の筆勢を失ふてゐるものもある。故に碑帖中の好文字を撰擇して臨するのである。古碑帖を臨するに就て

藩存と云ふ人の善き説がある。其説には古帖の文字は刻したもので加之に重刻の物も多く有るから、其文字は半ば死んでおる。又悉く死せるものも有る。文字の型を見るまでのものである。故に自分の筆にて之を活して臨しなければ成らぬと。獨り古帖のみならず今人の墨帖を臨するも亦た此心得でなくては成りませぬ。

臨 本

古碑帖等の文字を臨して條幅等に爲さんとするには、其字のまゝを臨するが通例である。缺損したる處は其缺損せしまゝ臨するのである。即ち一字缺けておれば之を書せず。半片缺けておれ

ば半片のみを臨するである。又長編のものにて一紙に収まらざるものは、其位置の宜しき處にて筆を止めることも有り。前後を除き、其中篇の文字の面白き所を摘録することも有る。此事を心得ぬ人は、詩文が完全してゐないから面白くないとか、脱字が有て好ないとか謂ふが、元來古碑等を臨して看るには、其文字を看るので有る。即ち其字を賞翫するである。何字が能く出来て居るか。何の筆が面白いとか。位置が能く收りておるか云ふて之を樂むので有つて、其書して有る詩文等には頓着し無いのである。故に古碑帖の臨本のみならず、長恨歌とか出師表とか云ふ様な長篇を、扇面等に書して人に與へるにも、位置の宜しき處にて

筆を止めて置くのである。但人に詩文を贈るときは、其詩文が主となり、文字は客となる。故に少し位置が悪くも亦た文字が善くなくも、其詩文を悉く書なければ成らぬ。即ち前の物は文字が主となり、後の物は詩文が主となる。此主客と云ふことを心得て置くも亦た必要のこころ思ひます。

能書は筆を擇ばざるの辨

俗諺に能書は筆を擇ばずとか。弘法は筆を擇ばずとか云ふが、右は何より生ぜし譌傳で有るか知らぬが、能書は筆を擇ねばならぬ。好筆でなければ善書は作れないのです。葵邕曰。若迫于事。雖中山兔毛不能佳也。と是則ち一の證でず。王右軍曰。書虛紙用強筆。書

強紙用弱筆。強弱不等則參差不入用。と是則ち二の證である。其れから弘法は筆を擇ばずと云ふも其弘法が當時の東宮殿下に筆を獻じた文に云ふに。狸毛筆。右伏奉。今月十五日。令旨。即教筆生槻木小泉。且造得奉進。良工先利其刀。能書必用。好筆。刻鏤隨用。改刀。臨池逐字變筆。字有篆隸八分之異。眞行草篆之別。臨寫殊規。大小非一。對物隨事。其體衆多。卒然不能總造。伏願鑒察要用者。云々。是を以て空海も亦た筆を擇んだと云ふことも判然する。又弘法も筆の誤りと云ふは。綱網も筆の誤りと云ふことにて。綱網と弘法と國音相近きが爲めに謬傳されたので有りませう。綱と網とは僅かの違ひにて往々誤る人もある。故に綱網も筆の誤りと云ふ俗

諺があるのです。

紙 墨

紙墨も亦た作字に大に關係します。日本紙に書するには日本の墨が適し。支那の紙に書するには支那の墨が適する。其れから強紙には濃墨が適し。弱紙には淡墨が適する。支那の宣紙の如き墨を紙に吸収するものは餘り濃き墨では筆が自由に動がぬ。扇面の如きものは濃墨でなければ光澤を生じない。又毛の硬き筆には濃墨が適するが毛の弱き筆は濃墨では筆が自由にならぬ。其れから墨を筆に濕す加減もある。古人も亦た種々説て居る。皇象曰。用墨作楷宜乾。然不可太燥。燥以求險。潤以取妍。故曰乾研墨濕點

筆。こあるが。此時代の楷は今の楷書と異り八分の如き字である。王右軍曰。用筆者。墨不過三分。甚深則毛弱無勢。こ此の三分こ云ふは十分に濕しては筆の勢を失ふを以て十分の三と思ふ程墨を濕すこ云ふ意にて。筆鋒一寸あるものは其鋒きに三分丈け濕すこ云ふことでは無ひのです。又歐陽詢曰。墨淡則傷神彩。墨濃則滯鋒毫。肥則剩肉。瘦則露骨。と姜堯章曰。紙筆墨皆善書之一助也。と墨は我國に可なるの物が舶載しておるが。紙に至りは好き物は更に有ませぬ。支那では統絹本よりは善き紙本を賞翫します。字を書くには支那の好き紙に過ぐるものは無いのである。

文字の變遷

書の起りは黃帝史蒼頡が仰觀日月奎星圖曲之勢俯察龜文鳥迹之象博采衆美合而爲字。とあり實に今より大約四千四百年前の事である。其蒼頡が作りし字は如何なるものが證とすへき物が無い。其後の物に於て高陽氏幣、堯布、舜幣、禹幣、湯幣等は金石の書に其銘字が載せてあつて亦た幣布を摸造せしものも往々有るなれども果して其眞の幣布等有て摸せしものか後世造りしものか判然しませぬ。其疑問は疑問として其銘字の一二を左に示します。

高陽氏幣 平陽

同 武平

禹幣 𠩺 𠩺 𠩺 二 全 安邑貨二金

右の如きものにて。若し此が眞に有りしものとすれば。大約四百年前の文字である。其後商周の時代に至りては。鐘鼎彝器。其他の金石物に據て。確と證するものがある。即ち其文字を左に列擧す。

𠩺 𠩺 𠩺

折子孫

𠩺 𠩺 𠩺

倒矢立戟

𠩺 𠩺 𠩺

作祖辛彝

商祖辛觶

雙爵父辛爵 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺

雙爵父辛 雙爵即雙雀也

右は殆んど三千四百年計り前の文字である。此字より推測するときは前にある高陽氏幣の平陽武平の文字は後世に至りて造りしものかと想はれる。

周婦壺



彝婦亞虔

右は周にて大約二千八百年前の文字である。以上の文字を古文と云います。

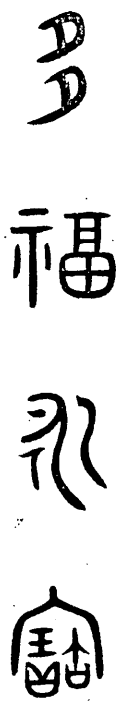
大篆



其淵也

右は周宣王の太史史籀が造る所の大篆にて籀文又は籀書籀篆とも云ふ。今より大約二千六百八十年前の文字である。其れから東周の時代に至りては

齊太公豆



多福永寶

等にて秦の時代には

秦權

廿六年皇帝

廿六年皇帝

盡并兼天下

盡并兼天下

秦琅邪

皇帝曰金

皇帝曰金

臺石刻

石刻盡

石刻盡

右琅邪臺石刻は秦始皇丞相李斯が作る所の小篆にて又秦篆とも云ふ。今より二千百年計り前の文字です。又秦下邳人程邈が雲陽の獄中で古文大篆の環曲なるものを省きて易直と爲し隸書三千字を作り。上谷王次仲は八分を作り。漢に於て右等の書を今文と稱して之を用ひたとあります。併し其文字を證するものはないが。西漢の谷口鼎銘字を左に

西漢谷口鼎

西漢谷口鼎

右は今より一千九百五十年計り前の文字にて程邈の時より百四五十一年後の文字である。此を以て程邈が作りし隸書を粗ぼ推

測せらるゝ。是れ則ち始めて方形なる文字が出来たので。今の正書^の祖^でありて之^を古^隷と稱^します。其れから東漢の初世のもの^は

建武^中年三月丙甲

漢錢范
底文

にて今より大約一千八百六十年計り前の文字である。

言中倫

右は漢石經文にて即ち東漢の正書である。此を分書又は八分と

稱^します。建武泉范より百三十年後にて。今より一千七百十年計り前^であります。

漢宗伯韓仲元

魏太和景元
石門摩崖

右は魏の泰和六年のものにして今より一千六百六十年計り前の文字^です。

大康八年二月

晋太康
臨安甌

右は西晋のものにして今より一千六百計り前である。

武平元年

北齊徂來山
摩崖殘字

右は北齊武平年間のものにして。今より一千三百三十年前の文字である。八分より楷に移るの漸であります。

安民和衆

歐陽詢
姚辯碑

右は唐初のものにして一千二百七十年計り前の文字である。以上は即ち古文より篆に移り篆より隸に變じ隸より楷に移りし

概略である。此他六國の異文もあり。漢に至りても三段碑祀三公山碑等の篆體もあり。又隸書にも體の異なるものが多くある。併し文字の變遷の順序を示すときは。先づ右に載する如きものである。尙ほ正書の體は東亞新字稿に載せておきました。又行と草とは後編に見はします。

本篇ニ記載アル。行草ノ部。及ヒ。東亞新字稿ノ
二書モ。道人ガ非常ノ勉強ニテ。既ニ稿ヲ脱シ
テ。剗闕ニ附シテアリマス。故ニ遠カラス出版
ニ成リマス。右二書ニハ未タ古人ノ説カザル
新奇ノ論説モ夥多アリ。又新字稿ニハ學海、鴻
齋、香國、吟香、諸翁ノ卓越ナル批評モアリマス。
仍テ茲ニ豫告シテオキマス。

博文館



明治三十六年四月五日印刷
明治三十六年四月八日發行

書學徑捷
定價金五十錢

著者 前田 圓

發行者 大橋新太郎

東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 水谷 景長

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 會社 博進社工場

東京市小石川區久堅町百八番地

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

博文館發行
書學書類

博文館發行習字手本書類

關演南君著

▲行書類纂

全十二冊和裝上製
大判千二百餘頁
正價金貳圓拾錢
小包送四百文

市河米荈君著

▲楷行薈編

全十五冊和裝上製
大判千二百五拾頁
正價金參圓
小包送六百文

下田歌子女史編
坂正臣君書

女子用文習字帖

全二冊和裝
大判一四四枚

正價八拾錢
郵稅八拾錢

大和田建樹君編
小野鷺堂君書

明治女子書簡文

全壹冊和裝
大判二〇〇頁

正價四拾錢
郵稅四拾錢

大和田建樹君編
巖谷一六君書

明治書簡文

全壹冊和裝
大判二〇〇頁

正價四拾錢
郵稅四拾錢

依田學海君編
巖谷一六君書

新撰應用書翰

全壹冊洋裝
大判一七〇頁

正價三拾五錢
郵稅四錢

河村吉之輔君書

初學手紙の文

全二冊和裝
大判二〇〇頁

正價三拾五錢
郵稅六錢

橘千蔭君書

高等女子習字帖 烏丸帖

全壹冊和裝
大判白拔刷裝

正價三拾五錢
郵稅四錢

橘千蔭君書

假名習字帖 新百人一首

全壹冊和裝
大判五〇枚

正價三拾錢
郵稅四錢

巖谷一六君著

一六蘭亭帖

全壹冊和裝
大判五〇頁

正價二拾錢
郵稅二拾錢

日下部鳴鶴君書

鳴鶴蘭亭帖

全壹冊和裝
大判五〇頁

正價二拾錢
郵稅二拾錢

瀨尾鷗齋君編纂

▲草叢

全十二冊和裝上製
大判千四百頁
正價金參圓五拾錢
小包送六百文

市河米荈君著

▲墨場必携

全六冊和裝上製
大判三百五拾頁
正價金七拾錢
郵稅八錢

市河米荈君著

▲略可法

全二冊和裝上製
大判三百頁
正價金四拾八錢
郵稅六錢

| | | | |
|--------|-------|-----------------|----------------|
| 柳澤小陽君著 | 三體千字文 | 全壹冊和裝 大判一五〇頁 | 正價四拾五錢 郵稅四錢 |
| 河村墨稼君著 | 十體千字文 | 全壹冊和裝 中壹冊判 | 正價二拾錢 郵稅四錢 |
| 卷菱湖君著 | 眞書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價七拾錢 郵稅八錢 |
| 佐瀨得所君著 | 眞書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價六拾五錢 郵稅六錢 |
| 歐陽詢君著 | 眞書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 |
| 市河米荈君著 | 楷書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 |
| 錢詠君著 | 隸書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 |
| 孫過庭君著 | 行書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 |
| 文徵明君著 | 行書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 |
| 市河米荈君著 | 行書千字文 | 全壹冊折石本 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 |

秦貽自鞭甫氏校

▲六書通

全三冊洋裝上製
大判三百頁
正價金七拾錢
郵稅六錢

三宅青軒君著

▲書法自在

全壹冊洋裝並製
大判二百二拾頁
正價金二拾五錢
郵稅六錢

石川鴻齋君著

▲書法詳論

全二冊和裝上製
大判二百頁
正價金四拾錢
郵稅六錢

| | | | | | | | | | |
|---------------|----------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 佐瀨得所君書 | 趙子昂君書 | 卷菱湖君書 | 孫過庭君書 | 王羲之君書 | 懷素君書 | 蘇東坡君書 | 文徵明君書 | 董其昌君書 | 佐瀨得所君書 |
| 行書千字文 | 行書蘭亭帖 | 書法千字文 | 草書千字文 | 天朗帖 | 聖母帖 | 落花詩 | 赤壁賦 | 赤壁賦 | 前出師表 |
| 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 長方壹冊折石本 | 大判壹冊和裝 |
| 正價三拾錢 郵稅四錢 | 正價三拾五錢 郵稅六錢 | 正價三拾錢 郵稅四錢 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 | 正價三拾五錢 郵稅六錢 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 | 正價三拾五錢 郵稅六錢 | 正價四拾五錢 郵稅六錢 | 正價貳拾五錢 郵稅四錢 |

